

## 村上春樹『風の歌を聴け』

上 倉 一 男

### 目 次

はじめに

1. 『風の歌を聴け』の書き出し — 自分が楽しめる文体を求めて
2. 言葉探しの始まり — 象について何かが書けたとしても、象使いについては何も書けない
3. 鼠 — 「金持ちなんて・みんな・糞くらえさ。」
4. 女性の消失  
終わりにかえて

### はじめに

1971年に村上春樹は高橋陽子さんと学生結婚をする。「かくして二人はおおげさな式はしないで、十月に区役所に婚姻届を出し、事は済んだ。いやほぼ済んだ。どこでどうやって暮らすかという問題が残っていた。」<sup>1</sup>とジェイ・ルービンが書いているように、この結婚した夫妻には住む場所と仕事が必要となった。結局陽子さんの布団屋をやっていた実家に転がり込むことになる。「当時、陽子の母はすでに亡くなり、姉と妹は家を出ていたから、新婚夫婦と陽子さん父親の三人で」<sup>2</sup>の暮らしが始まることになる。「村上の学業は途切れ、大学を出るまで結局七年かかった。一年留年しよう（注：take a year out, いわゆるギャップ・イヤー）決めたが、いつまでも義父に甘えていられないことはわかっていた。」<sup>3</sup>春樹はテレビ局に勤めることも考え面接にも行ったようだが、「仕事の内容があまりに馬鹿馬鹿しいのでやめた。そんなことをやるくらいなら小さな店でもいいから自分ひとりできちんとした仕事をしたかった。」<sup>4</sup>そしてジャズ好きだった春樹に出来ることはジャズ喫茶を開くことしかなかった。ふたりはバイトして250万円を貯めた。そして同額の金を銀行ローンで借り、国分寺にピーター・キャットという店を開いた。1974年のことである。ピーターという名前は以前飼っていた猫の名前である。「店は、そこ（国分寺駅の

南口）から横断歩道を渡り、国分寺書店の前を通り過ぎて、殿ヶ谷戸庭園沿いの坂道を下りきった角にあるトミービルの地下にあった。」<sup>5</sup>もちろんいきなり自己流で店を経営したわけではない。「村上春樹がアルバイトしていたお店は水道橋のジャズ喫茶「スイング」でしたが、奥様の方がアルバイトしたお店がジャズ喫茶「響」です。」<sup>6</sup>という風に、このピーター・キャットはジャズ喫茶での修行を積んで開店した店だった。

この頃の村上夫妻の貧乏ぶりは相当なものだったようだ。1973年か74年に2年間ほど、当時の国鉄（JR）の鉄道線路と私鉄の西武国分寺線の線路に挟まれた国分寺駅西の三角形の土地に建てられた家に住んでいた。電車の騒音はすさまじかった。春樹はこの土地を「三角地帯」と呼んでいる。その家の様子は次のように描かれている。

でも騒音を別にすれば、家の雰囲気自体はなかなか悪くはなかった。造りはたしかに古めかしいし全体的に傷んでいたけれど、床の間やら濡れ縁やらがあって感じは良かった。窓から差し込んだ春の光が、畳の上に小さな四角い日だまりを作り出していた。それは僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた。「借りることにしようよ」と僕は言った。「たしかにうるさいけれど、なんとか慣れると思うよ」

「あなたがそう言うんなら、それでいいわよ」と彼女は言った。

「ここでこんな風にじっとしているとき、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」「だって本当に結婚したんじゃない？」

「そりゃまあそうだけどさ」と僕は言った。

（中略）

引越は友達のライトバン一台で十分間にあった。布団と衣類と食器と電気スタンドと何冊かの本と一匹

の猫、それが我々の全財産だった。ラジオもなければテレビもなかった。洗濯機も冷蔵庫も食卓もガス・ストーブも電話も湯わかしも電気掃除機もトースターも、何ひとつなかった。我々はそれくらい貧乏だった。

(中略)

結局我々はその家に二年住んだ。

おそろしく建てつけの悪い家で、すきま風がいたるところから入ってきた。おかげで夏は快適だったが、そのかわり冬は地獄だった。ストーブを買う金もなかったのも、日が暮れると僕と彼女と猫は布団の中にもぐりこみ、文字通り抱きあって眠った。朝起きてみたら台所の流し台が凍りついていたなんてこともしょっちゅうだった。<sup>7</sup>

ピーター・キャットの人気メニューのひとつがロールキャベツであったようだが、そのことにちなんで村上春樹の『やがて哀しき外国語』の中には「ロールキャベツを遠く離れて」という章が含まれている。この章ではまだ小説を書く前の頃の様子と小説を書くことと思いついたあまりにも有名な神宮球場でのエピソードが次のように紹介されている。

僕は学生時代にはたしかに何かを書きたいという風に思っていた。具体的にいえば、映画の脚本を書きたかった。脚本がダメなら小説でもいいかなと思ったけれど、まず映画に興味があった。だから早稲田大学の映画演劇科というところに行ったわけだが、途中でこれは自分には向いていないと思って、書く希望を捨ててしまった。とにかく何を書けばいいのかもわからないし、どういう風に書けばいいのかもわからなかった。これを書きたいというような材料もテーマもなかった。そんな人間に映画の脚本なんて（あるいは脚本に限らずなんだって）書けるわけがない。そんなことは自明の理である。でも映画の脚本を読むことは好きだったから、授業には出なくとも毎日のように大学の演劇博物館にかよって古今東西の映画の脚本を読みあさっていた。今にして思えばということだが、これはなかなか勉強になった。<sup>8</sup>

村上春樹の小説の魅力は登場人物たちのユーモアを含んでウィットが効いた会話にあると言えるかもし

れないが、それは春樹自身の生来の才能にも増して、早稲田大学演劇博物館で彼が読みあさった映画の脚本にちりばめられた会話から学んだということも大いにあり得る。この春樹の「何を書けばいいのかもわからないし、どういう風に書けばいいのかもわからなかった」というジレンマは、『風の歌を聴け』の冒頭では次のように書かれている。

しかし、それでもやはり何かを書くという段になると、いつも絶望的な気分が襲われることになった。僕に書くことのできる領域はあまりにも限られたものだったからだ。例えば象について何か書けたとしても、象使いについては何も書けないかもしれない。そういうことだ。

8年間、僕はそうしたジレンマを抱き続けた。  
— 8年間。長い歳月だ。(p.7)<sup>9</sup>

「ロールキャベツを遠く離れて」のなかでは7年間という年月が記されているが、当時の村上春樹の生活は次のように語られる。

それから僕は大学を出て、結婚して、仕事を始めた（いや、逆だ。結婚して、仕事を始めて、それから卒業したのだ）。そして過酷な現実の生活に追われて、自分が何かを書こうとしていたことなんてすっかり忘れてしまった。借金も返さなくてはならなかったし、とにかく朝から晩まで馬車馬のように一しかしこれはあまりにも非文学的の常套句だな一せっせと働かなくてはならなかった。それを7年続けた。<sup>10</sup>

この7年とは高橋陽子さんと結婚した1971年から春樹が20代最後の年を迎えた1978年までを指すと思われる。

それから僕は29になって、とつぜん小説を書こうと思った。僕は説明する。ある春の昼下がりには神宮球場にヤクルト＝広島戦を見に行ったこと。外野席に寝ころんでビールを飲んでいて、ヒルトンが二塁打を打ったときに、突然「そうだ、小説を書こうと思ったこと。そのようにして僕が小説を書くようになったことを。

僕がそう言うと、学生たちはみんな哑然とした顔をする。「つまり……その野球の試合に何か特別な要

素があったのでしょうか？」

「そうじゃなくて、それはきっかけに過ぎなかったんだね。太陽の光とか、ビールの味とか、二塁打の飛び方とか、いろんな要素がぴったりとあって、それが僕の中の何かを刺激したんだろうね。要するに……」と僕は言う。「僕に必要なだったのは自分というものを確立するための時間であり、経験であったんだ。それは何もとくべつな経験である必要はないんだ。でもそれは自分のからだにしっかりとしみこんでいく経験でなくてはならないんだ。学生だったころ、僕は何かを書きたかったけど、何を書けばいいのかわからなかった。何を書けばいいのかを発見するために、僕には七年という歳月とハード・ワークが必要だったんだよ、たぶん」(中略)でも何はともあれ僕はあの春の午後に神宮球場に行って人けのない外野席に一あの当時の神宮はほんとうにすいていた一寝ころびながら、デイブ・ヒルトンがレフト線に綺麗な二塁打を打つのを、それで『風の歌を聴け』という最初の小説を書くことになったのだ。それはあるいは、僕の人生の中では唯一の「エクストラオーディナリーな(尋常ならざる)」出来事だったのかもしれない。<sup>11</sup>

また「人はどのようにして走る作家になるのか」(『走ることについて語るときに僕の語ること』)のなかでは、「小説を書こうと思いついた日時はピンポイントで特定できる。1978年4月1日の午後1時半前後だ。その日、神宮球場の外野席で一人でビールを飲みながら野球を観戦していた。神宮球場は住んでいたアパートから歩いてすぐのところであり……」<sup>12</sup>とこのヒルトンが二塁打を放った模様が描かれ、「晴れわたった空と、緑色をとり戻したばかりの新しい芝生の感触と、バットの快音をまだ覚えている。そのとき空から何かが静かに舞い降りてきて、僕はそれをたしかに受け取ったのだ。」<sup>13</sup>と語られている。「うちに帰って机に向かい、さあ何かを書こうとして気づいたのだが、僕はまともな万年筆ひとつ持っていなかった。新宿の紀伊國屋書店行って、原稿用紙を一束と、千円くらいのセーラーの万年筆を買ってきた。ささやかな資本投下だ。」<sup>14</sup>

「それが春のことで、秋には四百字詰めにして二百枚くらいの作品を書き終えた。」<sup>15</sup>そして『群像』新人賞に応募するわけだが、「翌年の春の始めに『群像』

の編集部から「あなたの作品が最終選考に残りました」という電話がかかってきたときには、自分が新人賞に応募したことなんてすっかり忘れていた。日々の生活があまりにも忙しかったからだ。」<sup>16</sup>と語られている。そして『風の歌を聴け』は第22回『群像』新人賞を受賞し、1979年6月号の文芸誌『群像』に掲載されることとなる。

その後『1973年のピンボール』を書き、フィッツジェラルドの短編の翻訳をするのだが、その当時の暮らしは「店を経営し(帳簿をつけ、仕入れをチェックし、従業員の日程を調整し)、自分でも毎日カウンターの中に入ってカクテルや料理を作り、真夜中に店を閉め、家に帰ってきてから台所のテーブルに向かって眠くなるまで原稿を書く」<sup>17</sup>というハードなものだった。この78年の秋に春樹が応援するヤクルト・スワローズは日本一になるのだが、彼にとって20代最後のこの秋のことを「素晴らしい天候が続く、とりわけ美しい秋だった。空が抜けるように高く、絵画館前の銀杏並木がいつにもましてくっきりと黄金色に輝いていた。僕にとっては二十代最後の秋だった。」<sup>18</sup>と記している。

## 1. 『風の歌を聴け』の書き出し — 自分が楽しめる文体を求めて

小説を今まで書いたことがない人が、いきなり小説を書くということはたとえどんなに小説家としての才能が眠っていてもたやすいことではない。この『風の歌を聴け』の冒頭にもその苦悩の様子は手に取れるように読み取れる。

「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。」(p.7)

この冒頭の文章を僕なりに理解すると、「文章がうまく書けない」「どう書いて良いのかさっぱり分からず途方に暮れる」というような「完璧な絶望」が存在しないのと同じように、書き上げて自分でも感心するほどの出来映えの「完璧な文章」なんてないのだと、春樹は自分に言い聞かせながら、原稿用紙に万年筆で文章を書きはじめたのだらうという気がする。この『風の歌を聴け』の冒頭を書くにあたって春樹がどんな模索をしたかについては次のように「小説

家になった頃」(『職業としての小説家』より)に語られている。少々長い引用だが紹介してみたいと思う。

……どんな風に日本語で小説を書けばいいのかもよくわからなかったのです。

でもまあ「たぶんこんなものだろう」という見当をつけ、それらしいものを何か月かかけて書いてみたのですが、書き上げたものを読んでも、自分でもあまり感心しない。「やれやれ、これじゃどうしようもないな」とがっかりしました。なんていえばいいんだろう、いちおう小説としての形はなしているのですが、読んでいて面白くないし、読み終えて心に訴えかけてくるものがないのです。書いた人間が読んでそう感じるんだから、読者はなおさらそう感じるでしょう。「やっぱり僕には、小説を書く才能なんかないんだ」と落ち込みました。普通ならそこであっさりあきらめてしまうところなんだけど、僕の手にはまだ、神宮球場外野席で得た *epiphany* の感覚がくっきりと残っています。

あらためて考えてみれば、うまく小説が書けなくても、そんなのは当たり前のことです。生まれてこの方、小説なんて一度も書いたことがなかったのだし、最初からそんなにすらすら優れたものが書けるわけがない。上手な小説、小説らしい小説を書こうとするからいけないのかもしれない、と僕は思いました。「どうせうまい小説なんて書けないんだ。小説とはこういうものだ、文学とはこういうものだ、という既成観念みたいなのを捨てて、感じたこと、頭に浮かんだことを好きに自由に書いてみればいいじゃないか」と。

とはいえ「感じたこと、頭に浮かんだことを好きに自由に書く」というのは、口で言うほど簡単なことではありません。とくにこれまで小説を書いた経験のない人間にとっては、まさに至難の業です。発想を根本から転換するために、僕は原稿用紙と万年筆をとりあえず放棄することにしました。万年筆と原稿用紙が目の前にあると、どうしても姿勢が「文学的」になってしまいます。そのかわりに押し入れにしまっていたオリベッティの英文タイプライターを持ち出しました。それで小説の出だしを、試しに英語で書いてみることにしたのです。とにかく何でもいから「普通じゃないこと」をやってみよう。

もちろん僕の英語の作文能力なんて、たかがしれたものです。限られた数の単語を使って、限られた数の構文で文章を書くしかありません。センテンスも当然短いものになります。頭の中にどれほど複雑な思いをたっぷり抱いていても、そのままの形ではとても表現できません。内容をできるだけシンプルな言葉で言い換え、意図をわかりやすくパラフレーズし、描写から余分な贅肉を削ぎ落とし、全体をコンパクトな形態にして、制限のある容器物に入れる段取りをつけていくしかありません。ずいぶん無骨な文章になってしまいます。でもそうやって苦労しながら文章を書き進めているうちに、だんだんそこに僕なりの文章のリズムみたいなものが生まれてきました。

僕は小さいときからずっと、日本生まれの日本人として日本語を使って生きてきたので、僕というシステムの中には日本語のいろんな言葉やいろんな表現が、コンテンツとしてぎっしり詰まっています。だから自分の中にある感情なり情景なりを文章化しようとする、そういうコンテンツが忙しく行き来をして、システムの中でクラッシュを起こしてしまうことがあります。ところが外国語で文章を書こうとすると、言葉や表現が限られるぶん、そういうことがありません。そして僕がそのときに発見したのは、たとえ言葉や表現の数が限られていても、それを効果的に組み合わせることができれば、そのコンビネーションの持つて行き方によって感情表現・意思表現はけっこううまくできるものなのだということでした。要するに「何もむずかしい言葉を並べなくてもいいんだ」「人を感心させるような美しい表現をしなくてもいいんだ」ということです。

(中略)

とにかくそういう外国語で書く効果の面白さを「発見」し、自分なりに文章を書くリズムを身につけると、僕は英文タイプライターをまた押し入れに戻し、もう一度原稿用紙と万年筆を引っ張り出しました。そして机に向かって、英語で書き上げた一章ぶんくらいの文章を、日本語に「翻訳」していきました。翻訳といっても、がちがちの直訳ではなく、どちらかといえば自由な「移植」に近いものです。するとそこには必然的に、新しい日本語の文体が浮かび上がってきます。それは僕自身の独自の文体でもあります。僕が自分の手で見つけた文体です。そのとき

に「なるほどね、こういう風に日本語を書けばいいんだ」と思いました。まさに目から鱗が落ちる、というところです。<sup>19</sup>

この引用にも書かれているように、日本語で書き上げた冒頭部分は自分で読み返してみてもちっとも面白くなく、春樹はしまい込んでいたオリベッティのタイプライターを引っ張り出して英語で書くという作業をし、それを日本語に置き換えてみた。「するとそこには必然的に、新しい日本語の文体が浮かび上がってきます。それは僕自身の独自の文体でもあります。僕が自分の手で見つけた文体。そのときに「なるほどね、こういう風に日本語を書けばいいんだ」と思いました。まさに目から鱗が落ちる、というところです。」と語っているように「まさに目から鱗が落ちる」がごとく、「新しい日本語の文体」つまりは「僕自身の独自の文体」が立ち現れて来たわけだ。そして彼は「何もむずかしい言葉を並べなくてもいいんだ」「人を感心させるような美しい表現をしなくてもいいんだ」という境地へと至ることになったわけでもある。

架空の作家ハートフィールドの言葉として「文章をかくという作業は、とりもなおさず自分と自分をとりまく事物との距離を確認することである。必要なのは感性ではなく、ものさしだ。」(p.10)と書いたあとに(「気分が良くて何が悪い?」1936年)よりの引用と書き記したのは偶然ではなく、春樹は上に述べたようにして、自分が楽しみ自由に気分良く書ける文体を手に入れたのだと言ってもいい。そして「うまくいけばずっと先に、何年か何十年か先に、救済された自分を発見することができるかもしれない。そしてその時、象は平原に還り僕はより美しい言葉で世界を語り始めるだろう。」(pp.8-9)という予感めいたものさえ手にした感触があったのだろう。もちろん「美しい言葉」とは美文を指すというよりも、まずは自分が書いていて楽しみ、それを読む読者も楽しめる言葉であり、文体であるのだと思う。

## 2. 言葉探しの始まり — 象について何かを書けたとしても、象使いについては何も書けない

「小さい頃、僕はひどく無口な少年だった。両親は心配して、僕を知り合いの精神科医の家に連れてい

った。」(p28)として紹介される「言葉」にまつわる逸話は、『風の歌を聴け』を書きはじめて春樹が持ち合わせたジレンマとも呼べるべきものだ。そして「文明とは伝達である」「もし何かを表現できないのなら、それは存在しないのも同じだ。いいかい、ゼロだ。」(p30)と精神科医が指摘した時に「言葉探し」の旅を村上春樹は始めることになったと言ってもいいだろう。この点に関して清水良典が「うまく語れない、ということ語るための小説。そんな奇妙な構造を『風の歌を聴け』は持っているのだ。」<sup>20</sup>と指摘しているのは的を射ている。そして彼はこの精神科医の治療について「結局、精神科医は「僕」の「無口」を治療しようとして、むしろ表現に対する一種の失語を決定的に与えてしまったのである。治療に失敗した「僕」は、その後は自力で「自己治療の試み」を模索するほかないだろう。」<sup>21</sup>と結論づける。つまりは「象について何かを書けたとしても、象使いについては何も書けないかもしれない」(p.7)という苦闘の始まりでもあったわけである。そんな春樹は「結局のところ、文章を書くことは自己療養の手段ではなく、自己療養へのささやかな試みにしか過ぎないのだから。」(p8)と思いつつも、清水良典が述べているような「自己療養の試み」の模索をすることが運命づけられたと言える。

「しかし、正直に語ることはひどくむずかしい。僕が正直になろうとすればするほど、正確な言葉は闇の奥へと沈みこんでいく。」(p.8)と言葉探しの始まりを春樹は宣言しているという風にも理解できるし、言葉探し、そしてもっと深刻には「言葉にまつわる病」の端緒がすべてここにあるのだとも言える。ジェイズ・バーの洗面所に酔って倒れていた「小指のない女の子」と「僕」はひと夏の淡い恋を体験することになるが、彼女が病んでいたとしたらそれも「言葉にまつわる病」であろう。

僕たちは随分長い間、口をつぐんだまま海と空と船をずっと眺めていた。夕暮れの風が海を渡りそして草を揺らせる間に、夕闇がゆっくりと淡い夜に変わり、いくつかの星がドックの上にまたたき始めた。

長い沈黙の後で彼女は左手でこぶしを作り、右手のひらを神経質そうに何度も叩いた。そして赤くなるまで叩きつけてから、まるで気が抜けたように手のひらをじっと眺めた。

「みんな大嫌いよ。」

彼女はぼつんとそう言った。

「僕も？」

「御免なさい。」彼女は顔を赤らめて気を取り直したように手を膝の上に戻した。「あなたは嫌な人じゃないわ。」

「それほどはね？」

彼女は少し微笑むようにして背いてから小刻みに震える手で煙草に火を点けた。煙は海からの風に乗って、彼女の髪の毛をすり抜けて闇の中に消えた。

「一人でじっとしてるとね、いろんな人が私に話しかけてくるのが聞こえるの。……知っている人や知らない人、お父さん、お母さん、学校の先生、いろんな人よ。」

僕は肯いた。

「大抵は嫌なことばかりよ。お前なんか死んでしまえとか、後は汚らしいこと……。」

「どんな？」

「言いたくないわ。」

彼女は二口ばかり吸った煙草をサンダルで踏んで消し、指先でそっと目を押さえた。

「病気だと思う？」

「どうかな。」僕は分からない、という風に首を振った。

「心配なら医者にみてもらった方がいいよ。」

「いいのよ。気にしないで。」(pp.138-139)

この「小指のない女の子」が幻聴に悩まされている様子は、『ノルウェイの森』の直子を連想させる。直子の「幻聴」についてレイコさんがワタナベ・トオルに送った手紙には直子の様子は次のように書き記されている。

あなたもこの一カ月手紙の返事を待ちつづけて苦しかったかもしれませんが、直子にとってもこの一カ月はずいぶん苦しい一カ月だったのです。それはわかってあげてください。正直に言って今の彼女の状況はあまり好ましいものではありません。彼女はなんとか自分の力で立ち直ろうとしたのですが、今のところまだ良い結果は出ていません。

考えてみれば最初の徴候はうまく手紙が書けなくなってきたことでした。十一月のおわりか、十二月の始めころからです。それから幻聴が少しずつ始ま

りました。彼女が手紙を書こうとすると、いろんな人が話しかけてきて手紙を書くのを邪魔するのはです。彼女が言葉を選ぼうとすると邪魔をするわけです。しかしあなたの二回目の訪問までは、こういう症状も比較的軽度のものであったし、私も正直言ってそれほど深刻には考えていませんでした。私たちにはある程度そういう症状の周期のようなものがあります。でもあなたが帰ったあとで、その症状はかなり深刻なものになってしまいました。彼女は今、日常会話するのにもかなりの困難を覚えています。言葉を選べないのです。それで直子は今ひどく混乱しています。混乱して、怯えています。幻聴もだんだんひどくなっています。<sup>22</sup>

直子が手紙を書こうとするといろんな人が話かけて来て邪魔をする。彼女は「言葉」を選ぶことが出来ない。こんな直子の長所は「直子」という名前を持つ女性が最初に登場する『1973年のピンボール』にすでに現れている。『1973年のピンボール』で新学期に大学のラウンジで話をする直子である。彼女の様子は「直子も何回かそういった話をしてくれた。彼女の言葉を一言残らず覚えている。「なんて呼べばいいのかわらないわ」直子は日当たりに良い大学のラウンジに座り、片方の腕で頬杖をついたまま面倒臭そうにそう言って笑った。僕は我慢強く彼女が話しつづけるのを待った。彼女はいつだってゆっくりと、そして正確な言葉を捜しながらしゃべった。」<sup>23</sup>

つまりこの「直子」たちの原型はこの「小指のない女の子」にあったと言っている。特に『ノルウェイの森』での緑は春樹が学生結婚をした高橋陽さんがモデルとなっていると語られるが、それが半ば正確な推測であったならば、直子のモデルとなった女性もいたはずじゃないか？という論議も良く持ち出される。春樹はそんなに多くの友達がいた人物ではなく、「あんまり友達はできなかったですね。大学の時は二人しかできなかった。一人はうちの女房。もう一人はそれも女の子。女の子の友達しかいないんだよね」<sup>24</sup>。ならば、このもうひとりの女の子が直子なのではないかと、ますます春樹が出逢った女性に「直子」のモデルになった人物がいたのかもしれないという憶測は好奇心をくすぐりもする。だが僕は少し違ったように「直子」については考えている。それはこの『風の歌を聴け』の冒頭と「無口な少年

だった自分」の逸話の中に露呈している「言葉探しの旅」、あるいはなにかを正確に表現するための正確な言葉がなかなか見つからないという「言葉にまつわる病」こそが「直子」を形作る原型として一人の女性として立ち現れているのではないかという捉え方である。つまりは「直子」とは村上春樹自身の言葉に関する苦悩の投影なのだという風に捉えることだって可能かもしれないと思えてならない。

### 3. 鼠 — 「金持ちなんて・みんな・糞くらえさ。」

この小説で「僕」の友達として登場する「鼠」について少し考えたい。鼠は金持ちの家の息子である。下に引用した箇所に「斜面をくりぬいた地下はガレージになっていて」とあることを考慮にいと、おそらくは阪急電車・神戸線の沿線の山の手にも彼の実家はあったのかもしれない。彼の家は次のように描かれている。

鼠は三階建ての家に住んでおり、屋上には温室までついている。斜面をくりぬいた地下はガレージになっていて、父親のベンツと鼠のトライアンフ TRIII が仲良く並んでいる。不思議なことに、鼠の家で最も家庭らしい雰囲気を用意しているのがこのガレージであった。小型飛行機ならすっぽりと入ってしまいそうなほど広いガレージには型が古くなってしまったり飽きられたりしたテレビや冷蔵庫、ソファー、テーブル・セット、ステレオ装置、サイドボード、そんなものが所狭しと並べられ、僕たちはよくそこでビールを飲みながら気持ちの良い時間を過ごした。(pp.106-107)

自分が金持ちの一家の息子でありながら、彼は金持ちを嫌っている。その理由を鼠は「金持ちなんて何も考えないからさ」(p.16)と説明しようとしている。そして鼠は通っていた大学も辞めてしまっている。

「大学には戻らない？」

「止めたんだ。戻りようもないさ。」

鼠はサングラスの奥から、まだ泳ぎ続けている女の子を目で追っていた。

「何故止めた？」

「さあね、うんざりしたからだろう？ でもね、俺は

俺なりに頑張ったよ。自分でも信じられないくらいにさ。自分と同じくらいに他人のことも考えたし、おかげでお巡りにも殴られた。けどさ、時が来ればみんな自分の持ち場に結局は戻っていく。俺だけは戻る場所がなかったんだ。椅子取りゲームみたいなもんだよ。」(p.116-117)

鼠は小説が書きたいと言っているし、実際、彼は書いた小説を「僕」に送ってよこす。「椅子取りゲーム」で自分の居場所を失った青年、「戻る場所」がなくやがては旅に出ることになる青年が鼠である。そして彼の旅は北海道の別荘で「羊」に取り憑かれたために、自らの命を絶つことになるとまで続くことになるわけだが(『羊をめぐる冒険』)、本論ではあまり詳しくは述べない。

鼠と「僕」の出会いについては次のように語られている。

僕が鼠と初めて出会ったのは3年前の春のことだった。それは僕たちが大学に入った年で、2人ともずいぶん酔っ払っていた。だからいったいどんな事情で僕たちが朝の4時過ぎに鼠の黒塗りのフィアット 600に乗り合わせるような羽目になったのか、まるで記憶がない。共通の友人でもいたのだろう。

とにかく僕たちは泥酔して、おまけに速度計の針は80キロを指していた。そんなわけで、僕たちが景気よく公園の垣根を突き破り、つつじの植込みを踏み倒し、石柱に思い切り車をぶっつけた上に怪我ひとつ無かったというのは、まさに僥倖というより他なかった。

僕がショックから醒め、壊れたドアを蹴とばして外に出ると、フィアットのボンネット・カバーは10メートルばかり先の猿の檻の前にまで吹き飛び、車の鼻先はちょうど石柱の形にへこんで、突然眠りから叩き起こされた猿たちはひどく腹を立てていた。

鼠はハンドルに両手を置いたまま体を折るようにかがみこんでいたが、怪我をしたというわけではなく、ダッシュボードの上に1時間前に食べたピザ・パイを吐いているだけの話だった。(pp.18-19)

「突然眠りから叩き起こされた猿たちはひどく腹を立てていた」と書かれた公園は阪神電車の「打出駅」を少し山手に上がったところに実在する。そして村

上春樹が通い教師から殴られた記憶しかないと言  
る芦屋市立精道中学校は、打出駅から商店街を抜けて  
下り阪神高速道路の高架下を横切ったところにある。  
今でもこの公園には鉄製のかなり大きな檻が残され  
てはいるが、檻の中にはなにもいない。そしてこの  
公園の隣の山側に隣接しているのが、芦屋市立図書  
館打出分室（かつての芦屋市立図書館）である。ツ  
タが外壁を這う趣きのある図書館だが、春樹は小さ  
い頃からこの図書館にはよく通い、大学浪人時代の  
1年間もこの図書館で過ごした。「図書館」は春樹の  
様々な作品に姿を現すことになるが、おそらくその  
源流と呼べるものは、現在の芦屋市立図書館打出分  
室にあるのであろう。

そして鼠がダッシュボードの上に吐いてたピザパ  
イとは三ノ宮にあるイタリアンレストラン・ピノッ  
キオで食べたピザかもしれない。この店では一枚一  
枚の焼いたピザに番号が付いていることで有名であ  
る。この店のことを春樹は次のように述べている。

散歩がてら山の手の小さなレストランまで歩く。ひ  
とりでカウンターに座ってシーフード・ピザを注文  
し、生ビールを飲む。一人の客は僕しかない。気  
のせいかもしれないが、その店に入っている僕以外  
の人々はみんなとても幸福そうに見える。恋人たち  
はいかにも仲が良さそうだし、グループでやってき  
た男女は大きな声で楽しそうに笑っている。たまに  
そういう日がある。

運ばれてきたシーフード・ピザには「あなたの召  
し上がるピザは、当店の 958,816 枚目のピザです」  
という小さな紙片がついている。その数字の意味  
がしばらくのあいだうまく呑み込めない。958,816?  
僕はそこにいったいどのようなメッセージを読みと  
るべきなのだろう？ そういえばガールフレンドと何  
度かこの店に来て、同じように冷たいビールを飲み、  
番号のついた焼きたてのピザを食べた。僕らは将来  
についていろんなことを話した。そこで口にされた  
すべての予測は、どれもこれも見事に外れてしまっ  
たけど……。でもそれは大昔の話だ。まだここにち  
ゃんと海があって、山があった頃の話だ。

いや、海も山も、今だってちゃんとある。もちろ  
ん。僕が話しているのは今ここにあるのとは別の海  
と、別の山の話なのだ。<sup>25</sup>

上の引用にもあるが「僕が話しているのは今ここ  
にあるのとは別の海」と語られるわけは神戸市が山を  
切り崩した土砂で海を埋め立て、ポートアイランド  
や六甲アイランドなどを作り、「海」が失われてしま  
ったことへの言及である。鼠と派手にフィアットで  
公園に突っ込み、まるで怪我ひとつ負わず「気にす  
るなよ。車は買い戻せるが、ツキは金じゃ買えない。」  
(p.20) と鼠が言ったあとで、自動販売機で半ダース  
ほどのビールを買い、「海まで歩き、砂浜に寝ころ  
んでそれを全部のんでしまうと海を眺めた。」(p.20)  
だが「僕たちはビールの空缶全部海に向かって放り  
投げ」(p.21) てしまったかつての「海」はもうな  
くなってしまった。この箇所は『羊をめぐる冒険』で  
もオーバーラップするように描かれることになる。  
また春樹は別の本では

堤防を上がると、かつてはすぐ目の前に海が広が  
っていた。なにひとつ遮るものもなく。でも今は、そ  
こにはもう海はない。

堤防の向こう側、かつて香櫨園（こうろえん）の海  
水浴場があったあたりは、まわりを埋め立てられて、  
こぢんまりとした入り江（あるいは池）のようにな  
っている。

そのすぐ西側に見えるかつての芦屋の浜には、高層  
アパートがモノリスの群れのようになっぺりと建ち  
並んでいる。<sup>26</sup>

とも語り「海」の消失を嘆いてもいる。

鼠は付き合いのあったひとりの女性と別れ話が持  
ち上がっている。そしてふたりの仲裁役を「僕」に  
持ちかける。

「頼みがあるんだ。」と鼠が言った。

「どんな？」

「人に会ってほしいんだ。」

「……女？」

少し迷ってから鼠は肯いた。

「何故僕に頼む？」

「他に誰が居る？」鼠は早口でそう言うと 6 杯目のウ  
ィスキーの最初の一口を飲んだ。

「スーツとネクタイ持ってるかい？」

「持ってるさ。でも……」

「明日の 2 時。」と鼠が言った。(p.98)



だが暑い中ネクタイ姿で「僕」が女に会いに出かけると、鼠は「止めたんだ。」と語り (p.105)、結局この女性はこの小説では姿は現さない。実際にこの鼠が別れた女性と「僕」が出逢うことになるのは『羊をめぐる冒険』まで読者は待つことになる。「小指のない女の子」が身ごもり墮胎したのは鼠の子だったのではないか？という推論も脳裏をよぎりはするのだが、鼠が別の女性と付き合いしていたことを考慮に入ると、この推察はあまり根拠を持たないのかもしれない。しかし「相手の男のことよ。すっかり忘れちゃったわ。顔も思い出せないのよ。」(p.144)と「小指のない女の子」が語る時、謎は謎のままに残される。

#### 4. 女性の消失

「僕はノートのまん中に1本の線を引き、左側にその間に得たものを書き出し、右側に失ったものを書いた。失ったもの、踏みにじったもの、とっくに見捨ててしまったもの、犠牲にしたもの、裏切ったもの……僕はそれらを最後まで書き通すことはできなかった。」(p.12)

春樹の小説ではとりわけ女性の消失、つまりは何らかの付き合いがあったり親しくしていた女性が消えるといったことが語られることが多い。この一番最初に書かれた物語にその傾向はすでに現れている。そうした「女性の消失」ということについて考えてみたい。

僕は21歳で、少くとも今のところは死ぬつもりはない。僕はこれまでに三人の女の子と寝た。

最初の女の子は高校のクラス・メイトだったが、僕たちは17歳で、お互いに相手を楽しんでいると信じてこんでいた。夕暮の繁みの中で彼女は茶色のスリッポン・シューズを脱ぎ、白い綿の靴下を脱ぎ、淡い緑のサッカー地のワンピースを脱ぎ、あきらかにサイズが合わないとわかる奇妙な下着を取り、少し迷ってから腕時計も取った。それから僕たちは朝日新聞の日曜版の上で抱き合った。

僕たちは高校を卒業してほんの数ヶ月してから突然別れた。理由は忘れたが、忘れる程度のものであった。

それ以来彼女には一度も会っていない。眠れぬ夜に、僕は時々彼女のことを考える。それだけだ。(pp.74-75)

「僕」が高校時代に初めて知った女性であり、ぎこちないセックスを交わした女性とのあどけない付き合いである。「少し迷ってから腕時計も取った」という描写にぎこちなさとあどけなさが良く現れているように思う。そして人気のない草むらかどこかで愛し合ったのだろうが、それが「朝日新聞の日曜版」の上というところにも時代を感じさせられる。かつては高校の国語教師は朝日新聞の「天声人語」を読むように生徒に良く語ったものだったし、リベラルなインテリが読むものとして「朝日ジャーナル」・岩波の『世界』は定番だった。そんな懐かしい時代の懐かしい淡い恋だ。

二人目の相手は地下鉄の新宿駅であったヒッピーの女の子だった。彼女は16歳で一文無しで寝る場所もなく、おまけに乳房さえ殆んどなかったが、頭の良さそうな綺麗な目をしていて。それは新宿で最も激しいデモが吹き荒れた夜で、電車もバスも何もかもが完全に止まっていた。(p.75)

この夜はまず間違いなく「新宿騒乱事件」として記憶されている1968年10月21日の「国際反戦デー」だろう。春樹自身がこの夜に新宿にいたのかどうかは定かではないが、「小指のない女の子」がビーフシチューを作ったからと家に招いてくれた食卓での彼女との会話で「そして僕は機動隊員に叩き折られた前歯の跡を見せた。」(p.90)と当時のデモに参加したかのような記述がある。そしてこの新宿駅で拾ったヒッピーの女の子の話で興味深いのは、「何故だかは僕にもわからなかったが、僕は彼女を改札からひきずり出し、人通りの途絶えた道を目白まで歩いた。」(p.76)と記されているところだ。早稲田大学の学生だった「僕」が高田馬場まで歩いた、と書けば「そのひどく無口な少女は一週間ばかり僕のアパートに滞在した。」(p.76)もすんなりと繋がりそうだが、ここには「目白」という地名が書かれている。なぜ目白なのかといえば、早稲田大学に入学した当時の半年間だけ春樹は目白にある「和敬塾」という男子寮で暮らした経験があったからだと思える。男子寮に

ヒッピーの女の子なんて連れて帰れないし、「僕のアパート」とあることは奇妙に読者の興味をくすぐる現実とフィクションの「交錯点」だとも言えなくはない。そしてこの女の子は「嫌な奴」という書き置きとともに姿を消す。

三人目の女の子は大学の図書館で出逢った仏文科の女の子である。「彼女は真剣に（冗談ではなく）、私が大学に入ったのは天の啓示を受けるためよ」（p.101）とベッドの中で語った女の子である。そしてなぜだか理由も分からずに「翌年の春休みにテニス・コート脇にあるみずぼらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。」（p.77）『ノルウェイの森』の直子の「机の上には辞書とフランス語の動詞表があった。」<sup>27</sup>という風にこの自殺する仏文科の女の子は直子とフランス語という共通項を有している。そして言うまでもなくこの二人は首を吊って死んでしまうわけなのだが。そして「小指のない女の子」もまたフランス語をYWCAで習っている。当時はお洒落な若い女の子にはフランス語が人気だったと言ってしまえばそれだけの話なのかもしれないが、この3人はフランス語という共通項を持っている。

この小説にはまだ消えてしまった女の子がいる。それは「修学旅行の時に落としたコンタクト・レンズを捜してあげて、そのお礼にレコードを貸してくれた」（p.59）という架空のラジオ局N・E・Bの土曜の夜の番組「ポップス・テレフォン・リクエスト」で「僕」のためにビーチ・ボーイズの「カリフォルニア・ガールズ」をリクエストしてくれた女の子である。この女の子にLPを買って返そうと決めた「僕」は彼女の居場所を三日間必死に探す。そして彼女が「山の手にある二流の女子大の英文科」（p.70）に進学したことを突き止め大学の事務室に電話するが「彼女は今年の3月に退学届けを出したと教えてくれた。理由は病気の療養」（p.70）だと事務員は教えてくれる。なぜ休学ではなく退学なのか、と「僕」は不思議に思うが、このリクエストしてくれた女性も消えてしまった女の子に加えていいだろう。このラジオ局N・E・Bの土曜の夜の番組「ポップス・テレフォン・リクエスト」絡みで脊髄の病気で病院で寝たきりの17歳の女の子からの手紙がDJに届く場面が最後に出てくる。その子からの手紙

私は17歳で、この三年間本も読めず、テレビを見

ることもできず、散歩もできず、……それどころかベッドに起き上がることも、寝返りを打つことさえできずに過ごしてきました。この手紙は私にずっと付き添っていているお姉さんに書いてもらっています。彼女は私を看病するために大学を止めました。もちろん私は彼女には本当に感謝しています。私がこの三年間にベッドの上で学んだことは、どんなに惨めなことでも人は何かを学べるし、だからこそ少しずつでも生き続けることができるのだということです。（p.147）

この17歳の少女にずっと付き添って看病をしていているお姉さん。「彼女は私を看病するために大学を辞めました。」とあるが、これが「テレフォン・リクエスト」に「僕」のために「カリフォルニア・ガールズ」をリクエストしてくれた高校時代の女の子じゃないのか？と思えてならない。このラジオ番組の話は「僕」のところへ急にDJから電話がかかってくることから始まる。そしてこの挿話は脊髄を患った少女からの手紙に涙したそのDJの「僕は・君たちが・好きだ。」（p.149）という感極まった叫びで終わる。だとすると挿話は構成上から見て、このリクエストしてくれ大学を辞めてしまった子とこのずっと付き添って看病している大学を辞めた姉とを重ね合わせてとらえると挿話全体としての収まりがいいように思えてならない。

## 終わりにかえて

「小指のない女の子」も結局は姿を消してしまう。

左手の指が4本しかない女の子に、僕は二度と会えなかった。僕が冬に街に帰った時、彼女はレコード屋をやめ、アパートも引き払っていた。そして人の洪水と時の流れの中に跡も残さずに消え去っていた。僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める。泣きたいと思う時にはきまって涙が出てこない。そういうものだ。（pp.154-155）

この「小指のない女の子」が仲直りしたいから会おうと電話してきた夜、「大粒の夕立がやってきて庭の木々の葉を湿らせ、そして立ち去った。雨が通り過

ぎた後には海の匂いのする湿っぽい南風が吹き始め、ベランダに並んだ鉢植の観葉植物の葉を微かに揺らせ、そしてカーテンを揺らせ」(p.71) ていたとあるように「風」が吹いている。夏の「湿っぽい南風」である。そして彼女と海岸沿いの倉庫街を一緒に歩いた時にも「店を出て、僕たちは不思議なくらい鮮明な夕暮の中を、静かな倉庫街に沿ってゆっくりと歩いた。並んで歩くと、彼女の髪へのヤー・リンスの匂いが微かに感じられる。柳の葉を揺らせる風は、ほんの少しだけれど夏の終わりを思わせた。」(p.136) 夏の終わり、秋の訪れを思わせる風である。そしてそんな涼しい秋の匂いを含んだ風が吹き始める頃に

鼠はぱったりとビールを止め、バーボンのロックを無茶苦茶に飲み、カウンターの横にあるジューク・ボックスに際限なく金を放り込み、ピンボールの機械を反則サインの出るまで蹴とばしてジェイを慌てさせた。

「多分取り残されるような気がするんだよ。その気持はわかるね。」

とジェイは言った。

「そう？」

「みんな何処かに行っちゃうんだよ。学校へ帰ったり、職場に戻ったりさ。あんただってそうだろう？」

「そうだね。」

「わかってやれよ。」(p.110)

とあるように、いくつかの重要と思われる変化が起きる場面では「風」が吹いている。海辺の街ではごくありきたりな風かもしれないが、「風の歌」とは風のように吹きすぎていってしまうものたちの代名詞なのかもしれない。夏の湿った南風の夜に「小指のない女の子」が「僕」に近づいてきたが、「夏の終わりを思わせる風」の吹く夕暮れ時とともに「小指のない女の子」は失われてしまう。そして「夕暮になって涼しい風が吹き、あたりにほんの僅かにでも秋の匂いが感じられる頃」(p.110) に鼠もこの街を出て旅に出ることをひそかに決心する。つまりは「風の歌を聴け」とはそんな風に風によって吹き寄せられ、風とともに去って行く二度と出逢うこともない多くの知人や友人たちの「物語」を暗示しているかもしれない。つまり吹きすぎる風のように小さく静かな物語を聴いてくれという意味合いが込められている

ように思えてならない。

(注)

- 1 『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』、ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳、p.32 (新潮社)
- 2 同上
- 3 同上 p.33
- 4 同上
- 5 「1974年のピータ・キャット 村上春樹さんとの出会い」  
[http://moriq84.hatenablog.com/entry/2015/09/04/1974年のピータキャット\\_村上春樹さんとの出会い](http://moriq84.hatenablog.com/entry/2015/09/04/1974年のピータキャット_村上春樹さんとの出会い)
- 6 「<<村上春樹の世界>> 神戸、東京のジャズ喫茶を歩く」<http://www.tokyo-kurenaidan.com/haruki-jazz2.htm>
- 7 「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」(『カンガルー日和』)、pp.158-160 (講談社文庫)
- 8 「ロールキャベツを遠く離れて」(『やがて哀しき外国語』)、p.217 (講談社文庫)
- 9 テキストは『風の歌を聴け』(講談社文庫、第1刷2004年)を使用し、本文からの引用はすべてこの版からであり、ページ数は引用に続けて括弧に入れて示す。
- 10 同上、p.218
- 11 同上、pp.219-220
- 12 「人はどのようにして走る作家になるのか」(『走るということについて語るときに僕の語ること』) p.49 (文春文庫)
- 13 同上、p.50
- 14 同上
- 15 同上
- 16 同上
- 17 同上、p.52
- 18 同上、p.51
- 19 「小説家になった頃」(『職業としての小説家』)、pp.44-47 (スイッチ・パブリッシング)
- 20 『村上春樹はくせになる』、清水良典、p.99 (朝日新書)
- 21 同上、p.98
- 22 『ノルウェイの森』(下) pp.197-198 (講談社文庫)
- 23 『1973年のピンボール』 p.9 (講談社文庫)
- 24 ジェイ・ルービン、p.28
- 25 「神戸まで歩く」(『辺境・近境』) pp.291-292 (新潮文庫)
- 26 『辺境・近境 写真篇』松村映三(写真)・村上春樹(文)、p.208 (新潮文庫)
- 27 『ノルウェイの森』(上) p.86 (講談社文庫)